

トルコ共和国建国期の歴史教育におけるイスラーム史

—教科書の記述分析より—

小笠原 弘幸

九州大学大学院人文科学研究院

准教授

1. はじめに一トルコにおける政教分離と「イスラーム史教育」

1-1 2016年7月15日クー・デタ

2016年7月15日にトルコ共和国で起こったクー・デタ未遂は、まだ記憶に新しい。トルコ時間の15日夜半、イスラーム色を強める大統領エルドアンと与党である公正発展党政権に懸念を示した軍部の一部が蜂起、首都アンカラとイスタンブルでは、クー・デタに参加した部隊が空港などの主要地域を封鎖した。しかしエーゲ海岸の保養地マルマリスで休暇中であった大統領はかろうじて拘束を逃れ、16日早朝にはクー・デタに対抗する記者会見を実施。それに呼応した抗議運動が展開され、同日正午には、クー・デタの失敗が宣言された。

JFE21世紀財団アジア歴史研究助成によって私が研究させていただいているプロジェクト、「トルコ共和国建国期におけるイスラーム史教育」にも、クー・デタは思わぬ形で影響を与えた。7月23日に本プロジェクトの一環として九州大学にて、本プロジェクトの研究協力者であるトルコ共和国ビンギョル大学助教アフメト・エミン・オスマンオール氏を招聘し、国際ワークショップを開催する予定であった。社会学を専門とするアフメト氏はトルコとエジプトの比較教育を研究テーマとしており、ワークショップで報告していただくとともに、本プロジェクトについて有益であるはずの意見交換を行う予定であった。このときすでに航空券とホテルを手配して会場も確保済みであり、国内からの参加者の招聘準備も済ませ、関係者に告知を送ろうとしていた矢先であった。そしてアフメト氏のトルコ出国は、まさにクー・デタの二日後に予定されていた。クー・デタの知らせでワークショップ開催について不安がよぎったものの、未遂であったために問題はないだろうと当初は予想していたが、結局、彼は来日を取りやめることになった。同時期に、早稲田大学でもイスタンブル大学の高名な研究者を招いてのシンポジウムが予定されていたが、やはりそれも中止になったようである。航空券やホテルのキャンセル・払い戻しなどで後日、思わぬ苦勞をしたのだが、ここでは割愛する。また、同年夏に予定していた私のトルコへの史料調査も取りやめることになった。2000年にトルコへ留学して以降、2015年まで毎年トルコを訪れていた身としては残念であるが、

非常事態宣言が発令されている状態ではやむをえないことであった。私以外のトルコ関係の研究者の多くも、この夏のトルコ行きを断念したようである。

1-2 トルコ共和国とクー・デタの反復

以上が、クー・デタについて私が経験したささいな顛末である。こうした体験談は、本格的な学術論文とはやや風合いが異なるが、本アジア歴史研究助成の研究計画とかわるために、ここに紹介させていただいた。私の個人的な体験はともかくとして、この2016年7月15日クー・デタ未遂は、トルコ共和国の歴史上、大きな意味を持つといえるだろう。政権がイスラーム色を強めるたびに、世俗派の守護者を任じる軍部がクー・デタを起こすというある種の型は、トルコ共和国の建国以来繰り返されてきた。すなわちトルコでは、1960年、1971年、1980年そして1997年とクー・デタが発生している。ケマル体制再評価の先駆者である研究者メテ・トゥンチャイによれば、ムスタファ・ケマル存命時に行われた二度の野党結成そして野党解党という出来事も、60年以降のクー・デタと同じ構造であるという¹から、クー・デタを許容する政治文化は、実にトルコ建国以来のものといえる。しかし、2016年のクー・デタ未遂には、おおきな違いがあった。これまでのクー・デタは例外なく成功し、軍部によってイスラーム政権が排除され軍部の支持を得た世俗派政党が政権を担うという結果となっていた。だが2016年の場合にはクー・デタは失敗し、現政権がさらなる権力強化を進めるに至ったのである。

こうしてトルコ共和国は、クー・デタの反復という歴史を脱却し、新たなステージに入ったといえる。なぜクー・デタは失敗したのか。その理由として、公正発展党が政権について以来、軍部の権力が削がれつつあった点が指摘されている。世俗派の守護者を任ずる軍部は、当然ながら自身の影響力低下を好まなかったが、EU加盟という悲願達成のために民主国家として軍の権勢を抑えるという政策に反対することができなかった。また、2009年のエルゲネコン事件と2010年のバルヨズ計画をめぐることも、軍部の影響力は大きく低下した。2016年クー・デタの顛末は、「イスラーム」と「世俗」のバランスの逆転を象徴していたといえよう。

1-3 トルコと世俗化

以上のような視点は、現代中東の専門家やメディアによって一般的に語られているものである。一方で歴史学からは、もう少し長期的な視座からの説明ができるのではないかと思われる。イスラームと世俗の相克という構図の源流は、トルコ共和国成立前に遡る。オスマン帝国の時代より、イスラームと世俗化・西洋化をどのように進めていくかは、重要な課題であった。オスマン帝国は、イスラームを国教の座に据えつつも、いか

¹ Tunçay, *T.C.'nde Tek-Parti Yönetimi*, 333.

にして西洋の文物を受け入れるかというとりくみに腐心していた。いわば帝国においては、イスラームと近代化の融合が試みられていたのである。トルコ共和国の前身であるオスマン帝国は、イスラーム国家であった。イスラーム法（シャリーア）を国法とし、オスマン帝国の君主であるスルタンは「カリフ（イスラーム世界における宗教的な最高権威者）」を兼ねるとされた。かつてはアジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸に覇を唱えたオスマン帝国は、17世紀以降領土の縮小が続き、ヨーロッパから「瀕死の病人」という有り難くない渾名を頂戴するほどであった。そのオスマン帝国は、第一次世界大戦においてドイツ側に立って参戦する。歴史の結末を知るいまの我々から見れば、不適切な決断であったということもできようが、当時のオスマン帝国にあっては、ある意味で必然的な選択であった。当時の帝国を支配していた青年トルコ党の指導者たちが親ドイツであったこと、そして歴史的にオスマン帝国への領土的野心を持っていたロシアと、それまではロシアの南下に警戒心を持っていたイギリスが手を結んだことが、オスマン帝国がドイツにくみした理由である。

ドイツとともに第一次世界大戦に敗れ去ったオスマン帝国は、戦後、解体の危機に瀕した。オスマン帝国に君臨するスルタン＝カリフは、連合国、とくにイスタンブルを占領したイギリスの傀儡同然となり、帝国分割案（セーヴル条約）を唯々諾々として受け入れた。また、ギリシア軍はアナトリアのエーゲ海岸に上陸し、実力でオスマン領分割に乗り出したのである。それに対して、ケマルはアナトリアでレジスタンス勢力を糾合し、国民闘争と呼ばれる戦いの末にギリシアを撃退した。国民的英雄となったケマルは、オスマン帝国に見切りをつけ、スルタンを廃してトルコ共和国の建国を宣言する。宗教的象徴としてのカリフの存在は建国後わずかな間は許容されたものの、1924年、ケマルは反対意見を押し切ってカリフ制をも廃止した。ここにケマルは、トルコ共和国を、宗教から切り離された世俗国家として位置付けたのである。とはいえ、よく知られているように、トルコにおける「世俗」のありようは、欧米で言う完全な政教分離とは異なるものであった。すなわち、宗教は宗務庁の管理下に置かれ、国家が宗教をコントロールする形で「政教分離」が行われたのである²。

1-4 「高ケマリズムの時代」と本研究の射程

ムスタファ・ケマルが強力なリーダーシップを取って、新生トルコ共和国の国民形成を推進した1930年代は、研究者の間では「高ケマリズム high Kemalism の時代」と呼ばれている³。この時代の大きな特徴は、イスラームの排除—アラビア文字や宗教教育、神秘主義教団の廃止などに代表されよう—と強力なトルコ・ナショナリズムの推進

² トルコ共和国における宗教と世俗の問題については、新井（編）『イスラムと近代化』および粕谷（編）『トルコ共和国とラーイクリキ』が、邦語では第一に参照すべき基本文献であり、本節もこの二書に多くを拠っている。

³ Cagaptay, *Islam, Secularism, and Nationalism in Modern Turkey*, 43.

であったとされる。しかしケマル死後、あまりに極端な方針は失速する。そして 1945 年、第二次世界大戦の終結と同時にトルコに複数政党制が導入されると、抑圧されていた民衆のイスラームへの欲求が噴出し、1950 年の総選挙における親イスラーム政党である民主党の勝利をもたらす。そしてこれ以降の展開は、上述した 1－2 の後半で触れた内容につながってゆくのである。

トルコ共和国の歴史において、本稿が焦点を当てる 1930 年代は、その極端さにおいて際立っている。1930 年代のトルコ共和国における歴史認識は、「歴史テーゼ」あるいは「公定歴史学」と呼ばれる、極度にトルコ民族中心的なものであった。そして歴史教育も、これに基づいて行われた。公定歴史学とは、端的に要約すれば、「紀元前、人種的に優れたトルコ人は中央アジアに偉大な文明を築いていたが、乾燥化によってその文明は崩壊し、トルコ人は世界各地に散らばった。ヒッタイト人、アッシリア人など古代の国家を築いた諸民族は、こうしたトルコ人の子孫である」という歴史観である。いうまでもなく、これは現在の考古学や歴史学の成果に照らして、否定されてしかるべき見解である⁴。トルコ共和国においても、この歴史観はケマル死後、徐々に力を失い、現在では実質的に放棄されている。しかし 1930 年代においては、公定歴史学にもとづいた歴史教科書が書かれるなど、大きな力を持った。

非常にエキセントリックな内容が目立つ公定歴史学であるが、それ故に、公定歴史学を扱ったいくつかの研究は、極端さに目を奪われ、一次史料に基づいたうえで「実際にどのような主張がなされたのか」を見落とししているきらいがある⁵。本研究で取り扱う「教育におけるイスラーム史」についても、同様である。公定歴史学において、イスラームはどのように扱われていたのかを、当時使用されたテキストに基づいたうえで、客観的に位置づける必要がある。この作業は、イスラームが復活しつつある現在のトルコの状況を理解するうえで一迂遠であるのは歴史学のならいであるが一必須のものと考える。

本研究では、こうした問題意識のもと、1930 年代に利用された高校用歴史教科書『歴史』全四巻のうち、とくにイスラーム史を扱っている第二巻に焦点を当てて分析していきたい。

2 トルコ共和国公定歴史学

2-1 トルコ共和国公定歴史学のはじまり

『歴史』第二巻の分析に入る前に、公定歴史学について、あらためて説明しておかな

⁴ 当時の欧米でも、ドイツにみられるように人種主義にもとづいた歴史観が唱えられていたし、同時代の日本でも皇国史観が主張されていたから、同時代的に見れば、公定歴史学の「極端さ」は珍しいものではないとみなしうる。

⁵ 小笠原「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成」292.

くてはなるまい。ムスタファ・ケマルは、幼少時より、歴史と数学に秀でていたことで知られる。そのケマルは長じてのち、600年の伝統をもつオスマン帝国を廃し、新しいトルコ共和国を建国した。ケマルは、新しい国家を構成するトルコ国民の精神的な寄り添たる新しい歴史をつくる必然性を感じていた。19世紀以降登場した国民国家において、民族＝国民の凝集力の主要な源は、歴史と言語であるとされる。新生トルコ共和国においてもそれは例外ではなかったし、ケマルはその必要性を見抜いていた。

ケマルが公定歴史学の着想を得たきっかけは、養女アーフェト・イナンとの会話であるといわれている。イナンの回想によれば、1928年にイナンがヨーロッパで刊行された地理書を読んだ際、トルコ人が二流の人種で野蛮人であると記されているのを知った。イナンがケマルにこの内容について伝えたとき、ケマルはその内容を否定し、それがきっかけで歴史についての調査が始まったという⁶。

公定歴史学についての重要な先行研究を著したビュシュラ・エルサンルや永田雄三によっても、この「契機」は紹介されている⁷。しかし、このイナンの回想を額面通り受け取るのは、やや注意が必要である。フェミニズム研究者イェシム・アラトによればイナンの回想においては、イナンが進歩的見解を着想しケマルに伝え、ケマルがイナンの提案を採用しそれに基づいた政策を行う、というパターンが何度か確認できる⁸。もちろんこれが事実ではないとする積極的な根拠はないが、彼女の回想録において同じようなパターンが繰り返されることは、彼女の伝えるケマルに関する逸話が、彼女に都合のよい形になっている可能性も無視できないであろう。公定歴史学の成立に関するエピソードも、イナンが自分の「手柄」を強調した内容になっているのではないだろうか。

さらに重要なのは、イナンの発言が直接の契機であろうとなかろうと、公定歴史学の下地は、トルコ共和国成立間もない時期より存在していたことである。公定歴史学の主要な主張の一つが、トルコ人は優れた人種であるという、その人類学的観点である。こうした人種的見解は、トルコだけで主張されていたのではなく、当時の西洋でもひろまっており、西洋の「一流の」学者も唱えていた。たとえば、スイスの人類学者ウジェーヌ・ピットールの学説は公定歴史学の成立に影響を与え⁹、彼はトルコ共和国に招聘され厚遇を受けた。

こうしたトルコにおける人類学的な視点は、ナザン・マクスドヤンが明らかにしているように、1925年創刊の『トルコ人類学雑誌』においてすでに主張されていた。この創刊号において、トルコ人はその頭蓋骨の形から優秀な人種に属するなどという、公定歴史学における人種的主張そのままの見解が見られるのである¹⁰。すなわち、トルコ共和国成立間もない頃からこうした人種的主張はトルコ共和国の学問的言説として流通

⁶ Afetinan, *Atatürk Hakkında*, 256-257.

⁷ Ersanlı, *İktidar ve Tarih*, 147; 永田「トルコにおける「公定歴史学」の成立」113.

⁸ Arat, "Nation Building," 49-50.

⁹ 永田「トルコにおける「公定歴史学」の成立」169.

¹⁰ Maksudyan, *Türklüğü Ölçmek*, 107.

していた。公定歴史学成立の直接的な契機としてはイナンとの会話があった可能性もないではないが、公定歴史学に至る道は、すでに舗装されていたのだった。

2-2 『トルコ史概要』

ともあれ、ケマル主導のもと、イナンほかの「研究者」たちによって『トルコ史概要』¹¹が執筆される。この600ページほどの『トルコ史概要』については、永田雄三の研究に詳しく、拙稿でもすでに簡単に論じたことがあるため¹²、ここでは最低限度の紹介にとどめたい。

ケマルの命によって、のちにトルコ歴史学協会の会長を務めることになるユースフ・アクチュラ、さきに名前が出たアーフェト・イナンらが、トルコ史を編纂するプロジェクトに携わった。そして1930年に、公定歴史学にもとづいた最初の作品である『トルコ史概要』が完成した。本書は100部が印刷され、関係者に配布されたが、ケマルはこれを気に入らなかったとされる。とはいえその翌年である1931年には、『トルコ史概要』のダイジェスト版である『トルコ史概要序説』¹³三万部が作成され、各地に配布された。

『トルコ史概要』目次

本書はなぜ書かれたのか? 1-4

I 人類史序説 5-46

II トルコ史序説 47-70

III 中国 71-126

IV インド 127-162

V カルディア、エラム、シュメール 163-192

VI エジプト 193-226

VII アナトリア 227-264

VIII エーゲ海域 265-308

IX 古代イタリアとエトルリア人 309-328

X イラン 329-400

XI 中央アジア 401-606 (筆者注: うち、オスマン帝国が547-605、トルコ共和国が605-606)

¹¹ *Türk Tarihinin Ana Hatları*.

¹² 永田「トルコにおける「公定歴史学」の成立」115-124; 小笠原「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成」292-294.

¹³ *Türk Tarihinin Ana Hatları: Methal Kısmı*.

2-3 『歴史』

『トルコ史概要』そして『トルコ史概要序説』は、いわば公定歴史学のパイロット版であった。質量ともに本格的にトルコ国民に公定歴史学を教授する目的で作成されたのは、1931年に高校の歴史教科書として編纂された『歴史』全四巻である¹⁴。執筆陣に、実証的な歴史研究者としても知られるイスマイル・ハック・ウズンチャルシュルも加わった『歴史』の全体像や、『歴史』にたいする反響については、すでに拙稿で分析を加えたことがあるので¹⁵、ここでは詳述しない。しかし、『歴史』がいかなるグランド・プランに基づいて書かれたかを知ることは本稿の行論にとって有用であるため、以下にその目次を記すこととしたい。

『歴史』目次

第一巻 「先史時代と古代」

- I 人類史への序 1-24
- II 大トルコ史と、文明への一般的観点 25-53
- III 中国 54-63
- IV 故国におけるもっとも古い諸国家 64-68
- V スキタイ＝トルコ帝国 69-72
- VI インド 73-85
- VII カルディア、エラム、アッシリア 86-100
- VIII エジプト 101-126
- IX アナトリア 127-146
- X フェニキア人 147-154
- XI ヘブライ人 155-163
- XII イラン 164-183
- XIII エーゲ海 184-259
- XIV 古代イタリアとエトルリア人 260-346

第二巻「中世」

- I 古代から中世への移行 1-20
- II トルコ＝アランとヨーロッパの征服 21-22
- III ヨーロッパにおけるフン＝トルコ帝国 23-28
- IV アジアにおけるエフタル国家 29-30
- V 5世紀のヨーロッパ 31-37

¹⁴ *Tarih*, 4 vols.

¹⁵ 小笠原「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成」292-309.

- VI トルコ＝アヴァール帝国 38-39
- VII 6世紀の東ローマ帝国 40-45
- VIII アジアにおける突厥帝国 46-53
- IX テュルギシュ国家 54-56
- X カルクク＝トルコ国家 57-58
- XI ウイグル＝トルコ国家 59-61
- XII 西アジアと東ヨーロッパのトルコ諸国 62-75
- XIII 5世紀以降ヨーロッパに東方から来た新しい征服者 76-78
- XIV イスラーム史 79-184
- XV 最初のムスリム・トルコ諸国 185-194
- XVI カロリング帝国 195-201
- XVII ノルマン人 202-203
- XVIII カペー家 204
- XIX ドイツ諸侯国と神聖ローマ＝ゲルマン帝国の建国 205-206
- XX 教皇と皇帝の闘争 207-210
- XXI 11-12世紀におけるキリスト教徒の封建制 211-213
- XXII 大セルジューク帝国 214-224
- XXIII 十字軍の遠征 225-230
- XXIV カラ・キタイ国家 231-233
- XXV ホラズム・シャー国家 234-238
- XXVI トルコ・モンゴル帝国 239-247
- XXVII エジプト・シリアのトルコ諸国 248-257
- XXVIII アナトリア・トルコ諸国の時代におけるトルコ文明 258-286
- XXIX 中世のインド世界 287-291
- XXX ムスリム・トルコ統治下のインド 292-298
- XXXI ティムール 299-330
- XXXII インドのバーブル帝国 331-340

第三巻「近世・近代におけるオスマン・トルコ史」

- I オスマン国家の形成 1-31
- II オスマン帝国 32-70
- III 16世紀末までのヨーロッパ 71-113
- IV 帝国の衰退 114-187
- V 帝国の崩壊と滅亡 188-310

第四卷 「トルコ共和国」

第1部 トルコ共和国の建国

I トルコ国民による新国家の再形成 1-55

II 独立戦争 56-133

第2部 独立戦争後における革命と改革の諸局面

I ローザンヌから公式の共和国宣言まで 137-144

II 共和国宣言 145-155

III カリフ制の廃止 156-162

IV 共和国の時代における政治的諸潮流 163-202

V 宗教と法に関する革命と改革 203-240

VI 教育と規律における革命と改革の諸潮流 241-269

VII 経済と財政における革命と改革の諸潮流 270-317

VIII 衛生と社会保障における新実践 318-330

IX トルコ軍と国民闘争 331-335

3 『歴史』のなかのイスラーム史

3-1 『歴史』第二卷 XIV章「イスラーム史」概観

以上の『歴史』のなかで、預言者ムハンマド登場以降のいわゆるイスラーム史が取り扱われているのは、第二卷「中世」の XIV 章である。XV 章以降も、トルコ人が本格的にイスラーム世界に参入してからの歴史が取り扱われるから、広い意味ではイスラーム史に含まれる。しかし本稿では、ムハンマドがイスラームを創始してからアッバース朝が滅亡するまでの、いわゆるアラブ・イスラーム時代を対象とする。トルコ・ナショナリズムの影響が強い公定歴史学にあつて、トルコ人が本格参入する前のアラブ・イスラーム時代に焦点を当てた分析は、公定歴史学がイスラームという宗教とその歴史をどのように取り扱っているかについて明確な像を与えてくれると想定できるからである。なお、『歴史』の第三卷であるオスマン朝史部分は、ユースフ・アクチュラおよびイスマイル・ハック・ウズンチャルシュルが執筆したことがほぼ明らかであるが¹⁶、イスラーム史を扱う本章が、執筆陣のうち誰の手になるものかは残念ながら判然としない。

第二卷 XIV 章「イスラーム史」は、全 340 頁からなる第二卷のうち、79 頁から 184 頁にあたる。100 頁超という分量は、全体の約三分の一をしめ、第二卷のうちで最も長い章となっている。XV 章以降もトルコ人本格参入後のイスラーム史を取り扱っていることを鑑みると、イスラーム史の分量は極めて多いといえる。世俗主義を採用しイスラームを抑圧したという、高ケマリズムの時代についてのステレオタイプな評価は、イス

¹⁶ 小笠原「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成」295.

ラーム史にこれほどの重点を置いている事実によって、すでに疑義を呈されているとみなせるだろう。とはいえ分量だけではなく、内容についても検討しなければ即断はできない。以下では、XIV章の各節（A節～G節の全7節）について、内容を確認しつつ、特徴的な記述に着目して検討していく。その際、冒頭に、各節を構成する項を提示する。

3-2 「A. イスラームの宗教がアラビア半島で創始される」79-87頁

国土ーアラブ人の倫理と慣習ーイスラーム教以前のアラブ人の国々ーイスラーム教以前のアラビア半島の宗教的状况ーカーバとほかの諸寺院と巫女ー言語と文学

第XIV章「イスラーム史」は、まずイスラームが登場したアラビア半島の地誌から説明が開始される。その後、アラブ人の慣習、イスラーム登場以前のアラブ人の国々の説明が叙述される。注目すべきは、85頁のカーバ神殿の由緒について説明した箇所である。カーバ神殿とは、メッカに位置し、イスラーム教徒の巡礼（ハッジ）の目的地にして一日五回の礼拝の向きを規定する、イスラーム教徒にとって非常に重要な宗教的存在である。カーバ神殿は、イスラーム登場以前からアラブ人によって信仰の対象であった神々が祭られていた。このカーバ神殿について、『歴史』ではどのように語られているのか。

『歴史』におけるカーバ神殿の説明は、まず、イスラーム教徒によって一般的に信じられてきた伝説を繰り返している。すなわち、カーバ神殿はイブラヒム（アブラハム）によって建設された。イブラヒムは、妻ハジェル（ハガル）と息子イスマイル（イシュマエル）とともにこの地に至り、ザムザムの泉（カーバ神殿の湧水で、聖性が信じられている）でのどを潤した。その後、天使ガブリエルが黒石をもたらした。

以上の説明は、イスラーム教徒に伝わる伝承に則った説明である。しかしこの説明の最後に、「これらの全ては、当然、後代につくられた幻想である *uydurulmuş masallardır*」という一文が付け加えられている。こうした伝説的な内容は、トルコ共和国の進歩的・科学的な観点からは、否定すべきものであったためであろう。ただ、長々とカーバ神殿の説明に付け加えたこの一文は、いささか唐突な印象を受けるのも確かである。

カーバ神殿を説明した項に続く、本節の最後には、アラブ人の言語と文学についての項が配されている。そこでは、「アラビア語で話す人々は、人種の観点から一体性 *vahdet* を形成できない」と、『歴史』執筆時におけるアラブ世界の分裂を投影したような説明のほか、「イスラーム教徒の詩人やハティーブ [モスクでフトバを詠む者] のうち、とくにイスラーム教徒のトルコ人が、アラビア語を発展させた」「アラビア語辞書を作ったジェヴヘリーという名前の者はトルコ人である」といった、トルコ・ナショナリズムに立脚した記述もみられる。

3-3 「B. イスラーム教の登場時における近隣諸国の状況」 87-94 頁

イランービザンツエジプトームハンマドとその生涯ームハンマドの召喚ーコーランと啓示ー最初の啓示ーメディナでのムハンマド

B 節において、いよいよイスラームの登場が扱われる。当時のアラビア半島の周辺諸国の状況が説明された後、イスラームを創始した預言者ムハンマドの生涯が語られる。まずムハンマドの家族や結婚について説明がされるが、ムハンマドの前半生については、現在の研究でも詳しく明らかになってはいない。『歴史』では、「ムハンマドの子供時代・青年時代に関する情報は、のちに付け加えられた多くの作り事がある」との説明が添えられている。

ムハンマドが啓示を受け、イスラームを創始し、その後イスラームを広めることについては、詳しく説明されており、そこに何らかの「茶々」が入れられることはない。本節の最期には、次のようにムハンマドが評されている。

「ムハンマドと、彼がどのような宗教的組織と宗教的国家の指導者となったかを理解するには、とくに彼の軍事活動を調査することが必要である。逆にムハンマドを、すべてのことを天使から得ると同じように環境とやりとりする [啓示を非科学的であるとする批判ー引用者]、文盲で無知な麻痺し愚鈍な低劣なる偶像崇拜に貶める過ちから救うことはできない。しかし、ムハンマドと呼ばれる偉大な人物は、実際のところ、感性があり、思慮深く、構想力のある、同時代で最も高きをなした事々でもって証とされる存在である」¹⁷

このムハンマド評は、ムハンマドの宗教性について「科学的な」視点から批判する（これは、先に見たカーバ神殿にまつわる伝承への批判と共通する）一方で、歴史的な限界を持ったがなお偉大な人物として客観的に評価しようとするものといえよう。

またここで触れておきたいのは、ムハンマドについて、「預言者 *Peygamber*」「様 *hazret*」という語がつけられることはない点である。オスマン時代においてムハンマドについて語られる場合、こうした尊称がつけられるのが常であったが、『歴史』では宗教的バイアスのかかった語をムハンマドに付けることを避けているようである。

3-4 「C. ムハンマドの主要な遠征」 94-118 頁

バドルの戦い (624 年)ーウフドの戦いークライシュ族がムハンマドの側に従うーウフドの戦い後ーメディナの包囲と塹壕ーメディナの包囲において裏切ったユダヤ人たちの追放ー毎年の巡礼ーフダイビーヤの和約ーハイバルの戦いーメッカ征服ーフナインの包囲ーターイフ遠征とその包囲ータブーク遠征ーハリー

¹⁷ *Tarih*, Vol.II, 93-94.

ド・ブン・アル=ワリードのイエメン遠征—アラビア半島におけるイスラーム教に対する最初の蜂起：ムサイリマー別離の巡礼とムハンマドの死—ムハンマドの逝去（632年6月8日）—アブー・バクルの選出（632年6月8-9日）—アブー・バクルのカリフへの選出の翌日—カリフ位の真の性質

C節では、ムハンマドがイスラーム教徒の指導者としての地位を確立したのち、メッカを征服しアラビア半島を統一すること、そしてムハンマドの死後、アブー・バクルがカリフに選ばれ、正統カリフ時代が始まるところまでが扱われる。

ムハンマドの扱いは、前節同様、客観的な記述に終始する。しかしムハンマドの死後、ムハンマドの遺体を放置したまま、イスラーム教徒たちが混乱していたことが記述されるのは、ややイスラーム教徒とその共同体に対して批判的なスタンスといえようか¹⁸。

この節で興味深いのは、最後の項である「カリフ位の真の性質」と題された箇所である。

「ムハンマドは、宗教的事柄においても、社会的案件においても、改革をする必要がある時は、なににも束縛されなかった。常に進歩に向かって進んだのだった。死は、この進歩を突然に断ち切った。ムハンマド以降のイスラーム世界においてみられる停滞と衰退の原因は、ムハンマドにではなく、彼の後継者たちがムハンマドの仕事の魂ではなく、彼の本文を得たことに[コーランやハディースの語句に拘泥したことに、という意味か—引用者]、求められねばならない。このおおきな真実は、ただトルコ共和国の時代に、正しく理解され、実行されたのである」¹⁹

この一文は、直接にトルコ共和国と、ムハンマドそしてイスラームとの関係を表明したものである。本稿の主題にとって極めて重要である。ここでは、ムハンマドその人を進歩的な改革者として高く評価し、その後のイスラーム世界の停滞の原因はムハンマドにはないとする。そして、ムハンマドの真の仕事は、トルコ共和国によって受け継がれている、というのだ。宗教指導者としてよりも、社会改革者としてのムハンマドが強調されているように読みとれるが、一面的なイスラーム批判に偏った記述ではないことには注意する必要があるだろう。また、ムハンマドの後継者たち—すなわち、カリフたちのことであろう—を批判しているのも重要である。この一文は、共和国において、カリフ制が廃止されたことを暗に支持しているとも読み取れるからである（ただし、引用文の直前におけるアブー・バクルその人への評価は、決して低くないことを付け加えておく）。

¹⁸ *Tarih*, Vol.II, 115-116.

¹⁹ *Tarih*, Vol.II, 118.

3-5 「D. 正統カリフ時代」 118-125 頁

アブー・バクル (632-634 年) —コーランの最初の編纂—ウマル (634-644 年) —イラン遠征—エジプト征服—ウスマーン (644-656 年) —ダヒーリーの反乱—アリー (656-661 年) —スィッフイーの戦い—ハワーリジュ派とアリー暗殺—アラブ人の、イラン・東ローマ・トルコの諸文明との接触の最初の時代—政治的社会的構造

続く D 節では、アブー・バクルから続く正統カリフ時代が取り扱われ、日本でもイスラーム史の概説書に記載されているような説明が続く。記述の誤りとして、コーランの最初の編纂はアブー・バクルの時代だとしている箇所がある²⁰。正しくは、コーランの編纂が行われたのは、よく知られているように第三代正統カリフのウスマーンの時代である。

本節終盤の「アラブ人の、イラン・東ローマ・トルコの諸文明との接触の最初の時代」と題された短い項において、イスラーム教以前の全てが廃され、コーラン以外を読むことは非合法となり、さらにはアラブ人が征服の際、トルコ語・ペルシア語・ギリシア語で書かれた著作を破壊したことを述べている。こうした「焚書」のようなことが、この時期行われたという事実は、現在の研究では指摘されない。この記述は、アラブ人による他民族支配を強調する内容であり、後段で触れられるアラブ人とトルコ人の対抗関係の伏線として語られているように思われる。

3-6 「E. ウマイヤ朝」 125-148 頁

ムアウィヤ時代 (661-680 年) —ヤズィード時代 (680-683 年) とフサイン—マルワーン時代 (683-685 年) —アブドゥルマリク時代 (685-705 年) —アブドゥルマリクの後継者たち—ウマイヤ朝時代の北アフリカにおける困難の克服とスペイン征服—スペイン征服—スペインにおけるトルコ人—カディスの戦い—アブドゥッラフマーン・アル=ガーフィキー (729 年) —スペインにおける悪政—トルコ人とアラブ人の闘争—アラブ人の攻撃にあったトルコ文明—アブドゥルマリク時代に始まった闘争—アラブ人たちがトルコ人に対抗して適用した政策—ウマイヤ朝統治を破った諸集団、アラブではない諸集団 (シュウービーヤ)—ウマイヤ朝統治の崩壊

E 節では、正統カリフ時代に続く、ウマイヤ朝の時代が叙述される。基本的な記述の流れは、いわゆるイスラーム史の概説書と大きな違いはない。しかし、本節を構成する各項の見出しを見ればわかるように、一般的な概説書では書かれないような事柄が頻出しているのが見て取れる。すなわち、「トルコ人」の存在である。一般的に、イスラーム世界においてトルコ人は、アッバース朝時代に奴隷軍人として流入し、10 世紀には

²⁰ *Tarih*, Vol.II, 119.

トルコ人自身の王朝としてカラハン朝が建国される。以降、セルジューク朝などトルコ系王朝がイスラーム史の主演となってゆく。しかしウマイヤ朝時代には、まだトルコ人という集団として史料中に記載されることは乏しく、ゆえにウマイヤ朝通史の中でトルコ人集団が積極的な役割をもって描かれることはない。しかし『歴史』においては、ウマイヤ朝というイスラーム史の初期よりトルコ人の積極的な活動があるとして叙述が進むのである。

そしてその叙述の中でおおきなモチーフを構成しているのは、アラブ人とトルコ人の対抗関係である。「トルコ人とアラブ人の闘争」「アラブ人たちがトルコ人に対抗して適用した政策」という項に明確に見て取れるように、圧政を行うウマイヤ朝に対して、トルコ人が抵抗し、ついには「トルコ人」アブー・ムスリム²¹の手によってウマイヤ朝は滅ぼされるのであった。アブー・ムスリムは、ホラーサーン地方（現在のイラン北東部）で兵をあげ、アッバース朝革命を成功に導いた伝説的な英雄である。民族的出自は不詳であるが、オスマン朝時代より、彼をトルコ系とする史料がないわけではなかった。ただ現在の研究では、彼の民族性の確定については慎重な態度をとるのが普通である。しかし『歴史』では、イスラーム史の転換点であったアッバース朝革命を、トルコ人が担ったものとして描いているのであった。ほかにも、トルコ人はアラブ人に文化で優越しているという記述も、おなじくアラブ人対トルコ人という対立構造から描かれているものであろう²²。

全体的なウマイヤ朝史の流れとは別に、興味深い記述として、ウマイヤ朝軍がスペインに侵入した際に、スペインにトルコ人が居住していたというものがある。これは、ゲルマン人の大移動の際に、ヨーロッパそしてスペインに流入したアラン族がトルコ人であるという、公定歴史学の見解に沿った記述である。

また、トゥール・ポワティエ間の戦い（ウマイヤ朝のヨーロッパ侵攻が、フランク王国の宮宰カール・マルテルによって食い止められた戦い）²³について触れた後に、アッティラ（『歴史』では、当然のことながらトルコ人とされる）そしてオスマン帝国の第二次ウィーン包囲が、トルコ人のヨーロッパ進出が食い止められた例として挙げられているのも興味深い²⁴—「もしこのようでなかったとしたら [アッティラが勝っていたとしたら]、全ヨーロッパはトルコ人の影響と統治下にはいったであらう」。

²¹ *Tarih*, Vol.II, 148.

²² *Tarih*, Vol.II, 147.

²³ この記述では注が付され、トゥール・ポワティエ間の戦いの前線が、サカリヤ河の戦い（トルコ独立戦争時、ギリシア軍に対してトルコ軍が勝利した戦い）の前線と比較して説明されている。いわく、トゥール・ポワティエの前線は、サカリヤ河のそれより短い、と。この注からは、直接的ではないものの、サカリヤ河の戦勝を強調する含意も読み取れよう。

²⁴ *Tarih*, Vol.II, 139.

3-7 「F. アッバース朝」 149-167 頁

最初のカリフたち—ハールーン・アッラシード (786-809 年) —ハールーン・アッラシードの息子たち：
アミン、マームーン、ムウタスィム—アッバース朝の衰退—アッバース朝カリフたちの排除—アッバース朝時代のトルコ人たちと、トルコ人たちがイスラーム教徒になること—アッバース朝時代におけるイスラーム文明と、この文明におけるトルコ人たちの影響—ウマイヤ朝とアッバース朝時代の統治方法—社会生活

F 節では、アッバース朝の歴史が叙述される。ウマイヤ朝が、いうなれば「悪玉」として叙述されていたのに対し、アッバース朝は相対的に優れた王朝として描かれる。アッバース朝の最盛期とされる第五代カリフのハールーン・アッラシード治世に権勢をふるったバルマク家はトルコ人とされる²⁵ほか、ムウタスィムの母はトルコ人であり、それ故にトルコ人兵が重用されたと記述される²⁶。アッバース朝時代には、文人ジャーヒズが『トルコ人の美德』で論じたように、トルコ人の軍事的重要性が認識されていた。しかし、カリフの母がトルコ人であるがゆえにトルコ兵が重用されたという認識は、『歴史』に独特のものである。

「アッバース朝時代のトルコ人たちと、トルコ人たちがイスラーム教徒になること」および「アッバース朝時代におけるイスラーム文明と、この文明におけるトルコ人たちの影響」という二つの項は、記述量も長めであり（前者は 154-162 頁、後者は 162-165 頁）、『歴史』執筆者が力を入れて書いたと考えられる箇所である。ここでは、トルコ人がアッバース朝において果たした役割が強調されている。二か所、以下に引用する。

「初期アッバース朝カリフたちのホラーサーン出身者から成る軍団にいるトルコ人たちは、軍事・行政・警邏の観点で、ほかの諸民族 *kavimler* よりも高度であったことを証明していた。高い士気と正直さと勇敢な彼らの行動は、あらゆる件において彼らが信頼されることを示した。このために、カリフ・マンスールとマフディーの時代に特筆されるトルコ人たちは、ハールーン・アッラシードとマームーンの時代以降、最も重要な地位を占めた。このカリフたちは、行政、財政、土地の事々を、より重要と見なしたトルコ人たちに与えることを選んだのだった」²⁷

「トルコ人たちは、ただ戦場における榮譽ある勝利だけではなく、文明的・学問的分野における高い能力と、財政的・行政的事柄における素晴らしい成功でもって、アッバース帝国の統治者となった [以下、トルコ人を称える史料の要約がつづく]」²⁸

²⁵ *Tarih*, Vol.II, 149.

²⁶ *Tarih*, Vol.II, 151.

²⁷ *Tarih*, Vol.II, 156.

²⁸ *Tarih*, Vol.II, 159-160.

こうした、トルコ人を称賛した記述は枚挙にいとまがない。あたかも、アッバース朝がトルコ人国家であったかのようなのである。また、中世イスラーム世界を代表する知識人である数学者ファラービー、哲学者イブン・スィーナ（アヴィセンナ）などもトルコ人であるとしてその業績が称えられている²⁹。

3-8 「G. スペインにおけるアンダルスのイスラーム国家 (756-1031年)」 167-184 頁

アブドゥッラフマーンの国土の安寧、発展、行政—ヒシャーム (788-796年)—ハカム一世 (796-822年)—アブドゥッラフマーン二世 (822-857年)—アブドゥッラフマーン二世の後継者たち—アブドゥッラフマーン三世時代 (912-961年)—ハカム二世時代 (961-976年)—ハカム二世以降におけるアンダルスのウマイヤ朝—アンダルスの諸集団の諸王—要約

XIV章の最終節であるG節では、いわゆる後ウマイヤ朝以降の、スペインにおけるイスラーム王朝の歴史が取り扱われる。本節は基本的に概説的なスペイン・イスラーム史の内容であり、本稿の主題にとって重要とみなせるような意見の表明や特徴的な記述はない。

4. 結論と展望

以上、『歴史』第二巻におけるイスラーム史の内容を検討してきた。それでは、検討内容から何を導き出せるだろうか。

まず特徴的と思われるのは、ムハンマドその人に対しては、意外なほど直接的な批判を行っていない点である。伝説・迷信と考えられる事柄については切って捨てているものの、ムハンマド自身については、歴史的な偉人として高く評価しているといつてよい。ムハンマドに続くカリフたち、とくにウマイヤ朝に対しては手厳しいが、これはイスラーム全体への批判とはいえない。ウマイヤ朝以降のイスラーム史において主要なモチーフとなっているのは、アラブ人とトルコ人の関係である。ウマイヤ朝時代において、両者の関係は対抗関係であった。しかしアッバース朝時代に入ると、あたかもアッバース朝がトルコ人国家であるかのごとく、トルコ人の果たした役割が強調される。

全体として、迷信・伝説に類することへの批判やトルコ民族史的なバイアスは非常に強いが、ムハンマド個人やイスラーム文明の歴史に対しては、概して中立的か、あるいは好意的な姿勢を保っているといえるだろう。もちろん、トルコ共和国以前のオスマン帝国において著された歴史書では、ムハンマドを預言者であるとし、同時に尊称 (*hazret*) を付すのが通例であった。これに比べると、たしかに共和国期の教科書の記述は「非イスラーム的」(「反」ではなく)であるかもしれない。また、イスラーム史の記述量の多

²⁹ *Tarih*, Vol.II, 163.

さは特筆すべきであろう。これは、イスラーム史がトルコ共和国の子供たちにとって重点的に学ぶに足るものであるという認識、もう少し敷衍すれば、イスラーム史が自分たちのルーツの一つであるという認識を示しているだろう。

イスラームが徹底的に否定されたかにみえる 1930 年代—「高ケマリズムの時代」にあって、また高ケマリズムの象徴たる公定歴史学にあって、歴史としてのイスラーム文明は決して低い評価を受けていなかったことは、注目に値する。イスラームがトルコ人のアイデンティティの重要な構成要素であるとする「トルコ・イスラーム総合論」は 1980 年代以降、積極的に主張された。いまの公正発展党政権におけるイスラーム的・オスマンの言説の積極的利用に、このトルコ・イスラーム総合論が与えている影響は少なくない。1950 年代の定期刊行物を網羅的に調査して研究したガヴィン・ブロケットによれば、トルコ・イスラーム総合論の萌芽はすでに 1950 年代にみられるという³⁰。しかし本稿の検討からは、「トルコ人という民族性とイスラームという宗教が分かちがたく結びついている」という考え方そのものは、高ケマリズムの時代にすら、その存在を認められることが明らかとなった。より遡れば、オスマン帝国の近代化の時代より、イスラームとトルコ性の融合は、知識人によって重視されてきたテーマであった。オスマン時代より連綿と続く、民族性と宗教性をどう調和させるかという試みは、トルコ共和国史のなかに一貫して流れる伏流なのである。近年の公正発展党政権の隆盛を、高ケマリズムの時代でさえ抑圧しきれなかったオスマン帝国の遺産の復活であると位置づけるのは、いささか勇み足であろうか。

以上の仮説をより実証的なかたちで論ずるためには、1930 年代のほかのテキストを精査するのはもちろん、1940 年代以降の歴史教科書や歴史作品を網羅的に調査し、それらをトルコの知的言説空間のなかにマッピングしていく作業が不可欠であろう。本 JFE 研究助成によって、トルコ共和国の歴史叙述におけるイスラーム認識を明らかにする作業の端緒を開くことができた。今後は、この成果をより発展させていく所存である³¹。

³⁰ Brockett, *How Happy to Call Oneself a Turk*, 222-227.

³¹ 本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団・2015 年度アジア歴史研究助成による成果である。ここに記して感謝したい。また本研究の遂行に当たっては、科学研究費（研究課題 16K03090）の援助も受けた。

文献目録

- Afet İnan. Arı İnan ed. *Atatürk hakkında Hatıralar ve Belgeler*. Istanbul: Türkiye İş bankası Kültür Yayınları, 2007.
- Arat, Yeşim. "Nation Building and Feminism in Early Republican Turkey." In Celia Kerslake, Kerem Öktem, and Philip Robins eds., *Turkey's Engagement with Modernity: Conflict and Change in the Twentieth Century*, London: Palgrave Macmillan UK, 2010, 38–51.
- Brockett, Gavin D. *How Happy to Call Oneself a Turk: Provincial Newspapers and the Negotiation of a Muslim National Identity*. Austin: University of Texas Press, 2011.
- Cagaptay, Soner. *Islam, Secularism, and Nationalism in Modern Turkey: Who is a Turk?* New York: Routledge, 2006.
- Ersanlı, Büşra. *İktidar ve Tarih: Türkiye'de "Resmi Tarih" Tezinin Oluşumu (1929-1937)*. Istanbul: İletişim, 1996(2nd).
- Maksudyan, Nazan. *Türklüğü Ölçmek*. Istanbul: Metis, 2005.
- Tarih*. 4 vols. Istanbul: Maarif Vekaleti, 1931.
- Tunçay, Mete. *Türkiye Cumhuriyet'inde Tek-Parti Yönetimi'nin Kurulması (1923-1931)*. Istanbul: Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 1999(3rd. 1st ed. 1981).
- Türk Tarihinin Ana Hatları*. Istanbul: Kaynak Yayınları, 1999(3rd).
- Türk Tarihinin Ana Hatları: Methal Kısmı*. Ankara: Maarif Vekaleti, 1931.
- 新井政美 (編) 『イスラムと近代化—共和国トルコの苦闘—』講談社, 2013.
- 小笠原弘幸「トルコ共和国公定歴史学における「過去」の再構成—高校用歴史教科書『歴史』(1931年刊)の位置づけ—」『東洋文化』91(2011): 289-309.
- 粕谷元 (編) 『トルコ共和国とラーイクリキ (SOIAS Research Paper Series)』上智大学イスラーム地域研究機構, 2011.
- 永田雄三「トルコにおける「公定歴史学」の成立」『植民地主義と歴史学』刀水書房, 2004, 107-233.

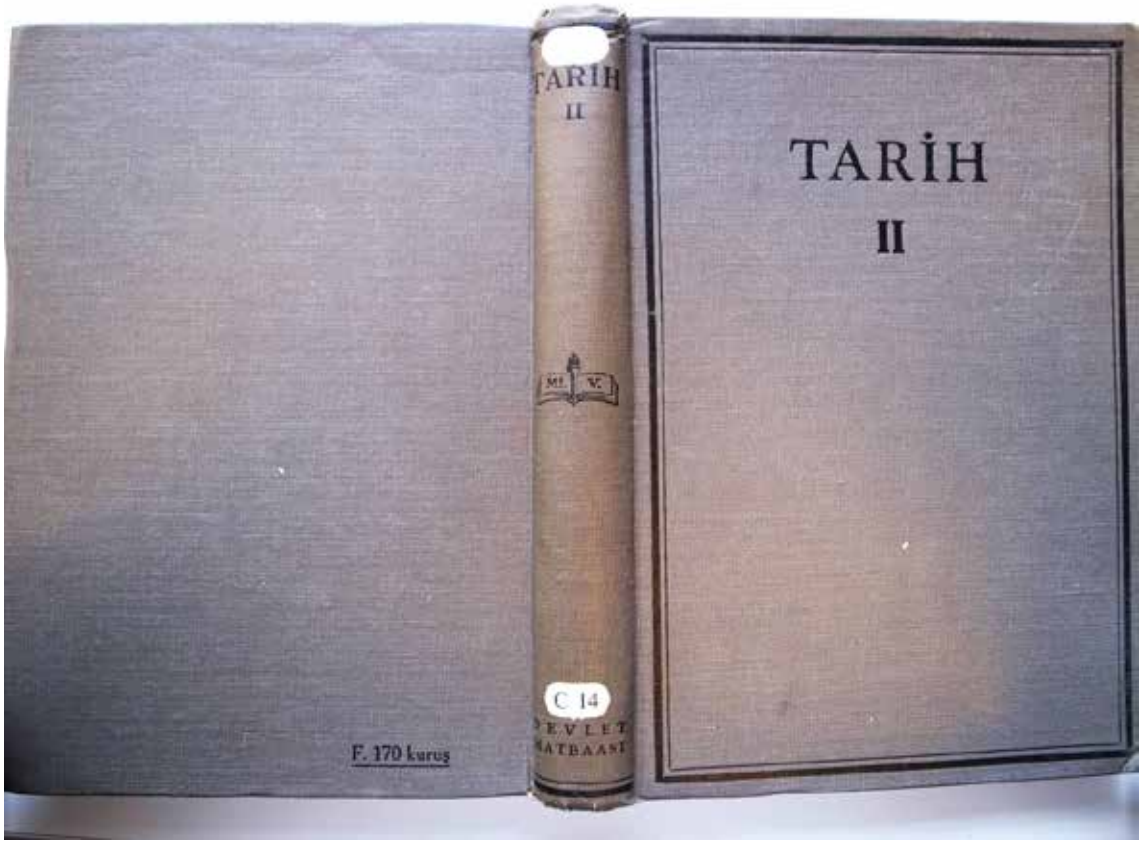


写真1 『歴史』第二巻表紙

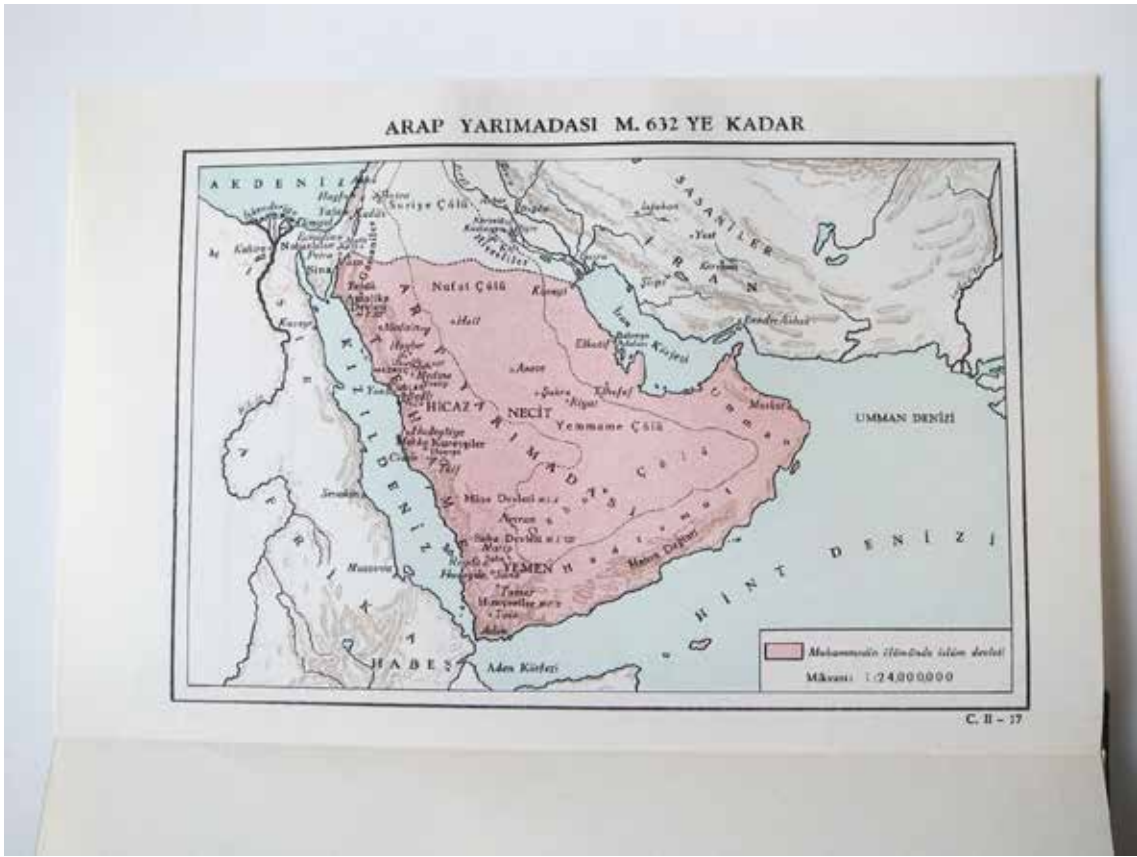


写真2 『歴史』第二巻所収 アラビア半島の地図

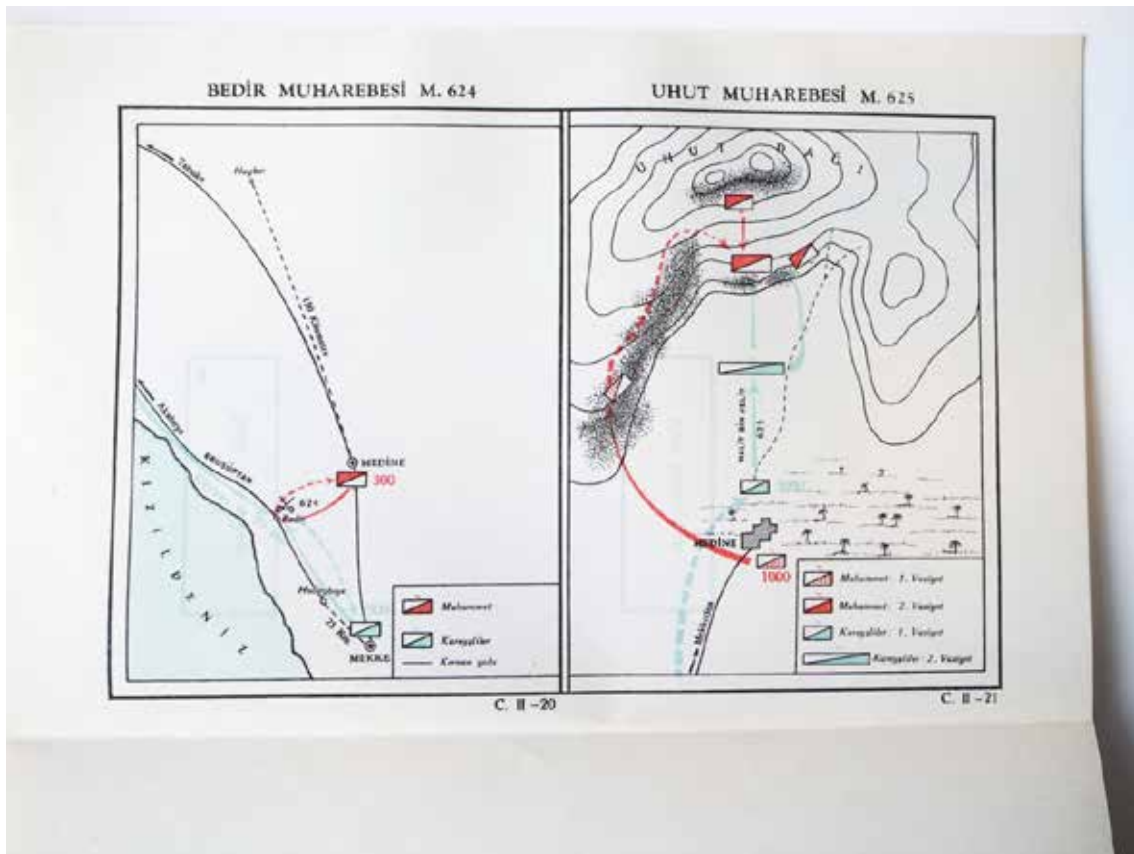


写真3 『歴史』第二巻所収 バドルの戦い、ウフドの戦い（預言者ムハンマドとメッカ旧勢力の戦い）関連地図